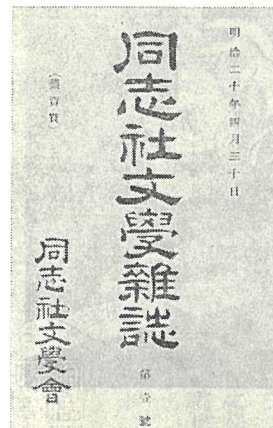
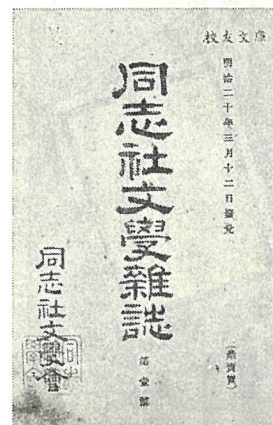


『同志社文学雑誌』



『同志社文学雑誌』は、同志社文学会を発行人として明治二十年三月十二日から明治二十八年四月二十日にかけて八十七号まで出版された定期刊行物である。最初の第一号は正規

の手段を取らなかつたため当局に没収された。翌四月三十日に第一号が正式に発行されたため、一号が二種類ある。また五十号には、数日遅れて発行された五十号付録がある

ので、全部で八十九冊とすることもできる。

『同志社文学雑誌』は五十二号以降は名称を『同志社文学』と更め、より文学的となり、内容も次第に充実している。全体的に見て、内容は政治、経済、文学、宗教、科学等の諸分野にわたる論説を主にし、しばしば名士の講演筆記を加えている。校祖新島襄先生は明治二十三年一月二十三日に他界されたが、翌月、二月二十五日発行の第三十号にそれに関する記事が載せられている。新島先生の筆になるものとしては、『同志社英学校設立ノ始末』(14号)、『明治専門学校設立旨趣』(15号)がある他、『アルフエース・ハーデー君記念』と題する「講演筆記(7・50号付録)がある。また50号付録なる新島先生記念号には、先生の書簡、漢詩、短歌などを見ることが出来る。他に注目すべき論説、あるいは講演筆記としては、大西祝「英国政党の起源」(1・2号)、安部磯雄「租税変動の四大大期」、浮田和民「新経済学」(14号)、「真理の愛」(38号)、深井英五「愛国論」(10号)徳富猪一郎「演説」(17号)、柏木義円「教育宗教の衝突」(65号)、坪内雄蔵「評論と創作」(72・73号)、鎌田玄四郎「ショーペンハウエルの厭世観を批

評す」(79・80号)などがあり、他にアルブレヒト、エドウィン・アルノルド、ラルネット、グローク、デビス等の外人の文章又は講演の翻訳もある。

14号あたりから、巻頭に一頁の社説を収めているが、これは、浮田和民、柏木義円、小崎弘道、磯貝由太郎、湯浅吉郎、児玉亮太郎などの同人によって書かれ、同志社人の思想をはっきりと打ち出している。日清戦争直前のキリスト教の受難期に同志社人が如何にこれに対処したかを、たとえば59号の「勅語と基督教」(柏木義円筆)などははっきりと示している。

さてこの雑誌は、論文の他、毎号、創作の漢詩、短歌、新体詩などを掲載している。投稿者の主なる者を挙げるならば、漢詩には新島襄、東州散史、坂本義夫、橋本嘯月、短歌には望月散人、湯浅吉郎、橋本嘯月、井上通泰、大西祝、池袋清風、新体詩には湯浅吉郎、三輪花影、磯貝雲峰、などがある。

これらの創作の他、この雑誌は欧米の文学の翻訳を数多く載せていることが注意される。その主なるものを挙げるならば、アメリカ文学では、ロングフェローの「村里の鍛鉄

場」(望月興三郎訳、7号)ヨルヴィング「新郎の幽霊」(春陽学人訳、9・10・13号)「フランクリン氏致富の秘訣」(望月興三郎訳、9・10号)「アービング「ロンドン府の日曜日」(素軒逸史訳、24号)「ブライアント「死懷」(春陽学人訳、11号、アービング「親子の情」(樵耕山人訳、32・33・34号)、ホーソルン「結婚場裏之死鐘」(かなめ生訳、26号)、などがあり、イギリス文学としては、ゴルドスミス「荒村」の漢文訳(武内忠次郎訳、41・42号)、クーパー「ジョン・キルピン」(東洋学人訳、11号)バイロン「涙」(磯貝雲峰訳、77号)「カーライル「人ノ定義」(東海漁史訳、12号)「ディケンズ「基督祭の宴」(志川生訳、84号)、ドイツ文学としては、シルレルの「若武者」(磯貝雲峰訳、57号)、フランス文学には、サン・ピエールの「有為転変」(薇倉道人訳、19・20号)、があり、他にイブセン「社会の敵」(高安三郎訳、63・64・66号)ドストイエフスキ「損害と侮辱と」(秋風吟客(高安三郎)訳、65・66・67号)がある。

これらの翻訳のできれば特に優れているとはいえぬが、明治二十年代においてかくも広範囲な外国文学をわが国に紹介した功績は大きい。長篇はすべて部分訳だが、カーライ

ルの「人の定義」は『衣裳哲学』より、サン・ピエールの「有為転変」は『ポールとヴィルジニー』から、ドストイエフスキの「損害と侮辱と」は「虐げられし人々」から取られたものである。イブセンとドストイエフスキの翻訳をのせた高安三郎は同志社人ではないが、新島先生に傾倒し、同志社に蔵書を寄贈したりした人である。この人は後、劇「江戸城明渡」(明治36年)を書いて有名となり、又学者としては「東西文学比較評論」(大正5年)で知られる。他の同志社人については大方は周知の人々であり、特に説明する要はあまりない。

この『同志社文学雑誌』については、数年前、大島、北垣、吉田、松村、店村、斉藤、清水、岡本の諸教授による共同研究班が作られ、人文科学研究所の支援を得て一応研究をまとめることができた。同研究所発行の『人文科学』第一巻、第二号(一九六九年刊)がこれであって、それは『同志社文学』総目次、解題、総索引を含んでいる。御参照下されば幸甚である。

(岡本昌夫・女子大学教授)